

「救い主の仕事始め」

出エジプト記 第13篇 1節～2節
ルカによる福音書 第2章 21節～24節

説教 本庄侑子 牧師

主の年2017年最後の日を迎えました。日本では12月25日を過ぎると大晦日の装いになりますが、教会暦では1月6日までクリスマスが続きます。今日の箇所は降誕後の出来事、主イエスの命名と、ヨセフとマリヤの神殿参りが記されます。クリスマスに関わる物語の中では読み飛ばしかねない地味な箇所かもしれません。

しかし、ルカによる福音書は、マリヤ、ザカリヤ、天の軍勢と御使、シメオンなど、神のご計画に巻き込まれ、クリスマスの秘儀に触れた者たちが賛美のリレーをするようにして神の恵みを歌い上げます。その間に記される今日の出来事も、賛美されるべきこととして高らかに歌い上げられているのです。

主イエスが誕生して8日が過ぎ、ユダヤ人の慣習に従って割礼を施す時となりました。その時、幼子に「イエス」という名前がつけられました。御使がヨセフとマリヤに「イエス」と名付けなさいと告げていたからです。「イエス」とは当時よくある名前で、「主は救い」という意味がありました。主イエスを通してこの世を救うという神のご計画を表す名前でした。

さらに、主イエスが誕生して40日後、ヨセフとマリヤは幼子イエスを連れて神殿参りをしました。レビ記に、男の子を出産した母親は40日の汚れの期間を過ぎたら神に犠牲を捧げて清めを完了するように、と定められていたからです。汚れは出産時の出血のことで、清めの期間は出産後の女性を休ませて体力を回復させる意味もあったと言われます。彼らはまた、幼子イエスを神に捧げました。出エジプト記に、男の子の初子は聖別するように、と定められていたからです。聖別とは、神のものとして取り分けることで、長男が聖別されるのは、家族全体が神の祝福の下に置かれるためでした。

「時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。」(ガラテヤ人への手紙4章4節～6節)

まことの神であられる方が、まことの人間と

となり、ユダヤ人として律法の下にお生まれになりました。それは、神から離れ、律法の下で罪の重荷に苦しむ私たちを救い出し、御子の霊を与え、新しい命へと解き放つためでした。

そしてまた、神の独り子イエスは、律法の下にある罪の重荷を全て引き受け、長男として十字架にかかって死んでくださいました。主イエスの後に続く兄弟姉妹、新しいイスラエルである教会に、呪いではなく祝福をもたらすためです。神が主イエスという長男のもとに、神の祝福を受ける家族を集めようとされた、そんな神のご計画がここから始まったのです。

こうして、幼子イエスが人間として、一人のユダヤ人として生き始めた箇所にもクリスマスの光は照らされています。思えば、私たちが教会から遣わされて生きる1週間は、この箇所のような日々ではないでしょうか。日曜日の朝、ことにクリスマスなどの特別な祝いの時は、輝かしい神の業の数々に触れて、爆発的な賛美に沸き立ちます。しかし、残りの時間は、遣わされた場所で、聖霊の助けを受けて、「父なる神よ。」と祈りながら、神を愛し、人を愛する、そんな新しい命に生かされる地味な日々です。しかしそこにこそ、クリスマスの光が照り輝いている。主イエスが、そこから仕事をお始めになったからです。

神が人間となってこの世に降り、律法の下にあるユダヤ人としてコツコツと生き、罪の一切を引き受け、神の民の長男としてご自身を十字架の上でお捧げになったのは、終わりの日に私たちが神の国に招き入れるためだけではありません。神がなお、この世を愛し、共におられるということ、この世において罪赦された者たちが愛し合い、仕え合う姿を通して証させるためです。

救い主は今、仕事納めの最中です。再びこの世に来て救いを完成させるための準備をしておられます。その日まで、私たち教会は全世界に先駆けて、やがて来る神の国がどのような所かを日々の営みを通して指し示します。来たる2018年も、クリスマスの光に照らされ、神の子として生かされる私たちを通して、神はご自身をあらわしてくださるのです。

(記 本庄侑子)